山梨学院大学 スポーツ科学研究，第２号，１－10，2019

ブラジルのサッカーを事例としたスポーツ組織と行為者の社会的性格との構造的関係

Structural Relationships between Sport Organizations and Social Character of Sport Participants in Case of Football in Brazil

笠　野　英　弘[1)]

Kasano Hidehiro [1)]

【要　約】

本稿では、ブラジルのサッカーにおけるスポーツ組織と行為者の社会的性格との構造的関係を解釈し、その現状と課題を明らかにすることを目的とした。すなわち、ブラジルのサッカーにおいて、スポーツ組織がどのような制度を創出し、その制度によってどのような行為者の社会的性格が形成されているのか、あるいは社会的性格形成に制度（やスポーツ組織）が及ぼす影響はないのか、その現状と課題を示すことを目的とした。また、その状況とドイツの事例を踏まえながら、日本におけるスポーツ組織の課題を示した。

調査及び分析の結果、ブラジルでは、スポーツ組織が多くの行為者に対する制度的環境を積極的に生成しないことで、彼らがサッカーは遊びとして楽しむものであるという社会的性格を形成していると考えることができた。ただし、それは、ブラジルにおいてサッカーが広く普及されているという条件が可能にしているものと考えられた。したがって、日本におけるサッカー（環境等）の現状を踏まえると、日本サッカー協会としては、積極的にリーグ戦や大会を設定したり指導者を派遣して練習をさせたりするのではなく、むしろ愛好者のゆるやかな組織化、すなわち、愛好者に対しては遊びとしてサッカーをする環境（場）を整備する程度にして、彼らに自由にサッカーをさせることで、彼らの社会的性格を高度化志向からプレイ志向にしていくことが可能になると考えられた。

Ⅰ　研究の背景と目的

１．行為者の社会的性格を形成する主体としてのスポーツ組織

本研究は、笠野（2018a）と同様に、日本におけるスポーツ行為者（以下「行為者」と略す）の高度化[注1)]志向という社会的性格[注2)]を、スポーツ組織が主体となって生成する制度や構造を通して変革していくことを目指すものである。笠野（2018a）は、ドイツの事例から日本サッカー協会の課題を示した[注3)]が、本稿では、ブラジルの事例から制度や構造を生成する主体としてのスポーツ組織（日本サッカー協会）の課題を示すとともに、ドイツとの比較も若干行う。

リーヴァー（1996,pp.172-174）は、ブラジルのサッカーを事例として、スポーツに関する組織（チームやリーグなど）に所属している行為者の方が、組織に所属せずに、いわゆる遊びとしてスポーツを行う者よりも、そのスポーツのファンとしての関与の度合いが高くなることを示している。これは、組織への所属の有無が行為者のスポーツに対する志向性等に影響を及ぼすことを示唆しているものとして捉えられる。また、黒須ほか（1987）と黒須（1988）は、民間クラブ育ちと学校運動部育ちそれぞれの行為者の性格等について、社会化過程を含めた比較分析を行っており、その比較によれば、クラブ育ちの選手は運動部育ちに比べて「相対的に自己本位的であり、また、タテ意識、伝統主義を軽視し、派手志向であり、手段主義に対して肯定的な傾向」（黒須ほか ,1987,p.126）があるという。これも、所属する組織の違いによって、行為者の社会的性格が異なって形成されることを示唆しているものといえる。しかし、これらの研究は、組織のどのような構造あるいは制度が行為者の社会的性格に影響を及ぼしているのかについては詳細に検討されていない。その点が検討されなければ、行為者の社会的性格を変革するための構造改革や制度改革の主体としてのスポーツ組織の課題を指摘することができない。

その点で、松尾（2015）の研究は、行為者の社会的性格に着目しながらも、それらに影響を及ぼすスポー

[1)] 山梨学院大学スポーツ科学部

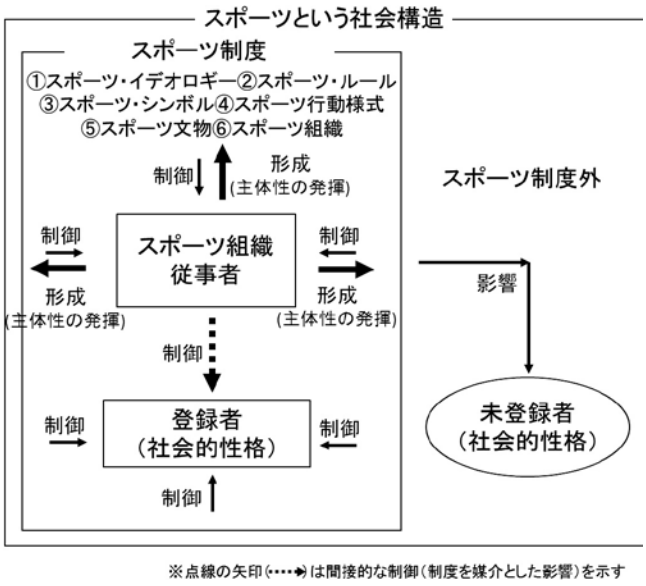

図１：スポーツ組織・スポーツ制度・行為者の関係
（笠野，2018b，p.50）

ツ組織・制度・構造がどのように形成されてきたのかを詳細に検討した示唆的な研究といえる。彼は、学校運動部と民間スポーツクラブのそれぞれで育成された競技者の志向、性向、スポーツ観の違いを検討するとともに、それらを組織や構造との関係から分析している。しかし、それらの関係を分析するにあたっては、社会的性格形成に影響を及ぼす対象としての組織や構造の範囲をどこまで視野に入れるのかが難しい問題であるという（松尾 ,2015,p.250）。そこで、笠野（2018b）は、「スポーツ組織が形成する制度を通して行為者の社会的性格を形成するという…範囲設定をすることによって、社会的性格あるいはスポーツ制度の主体的な変革を構想しやすくなり、変革の視点を示しやすくなる」（笠野 ,2018b, p.54）といい、図１の分析枠組みを示した。

ドイツを事例とした笠野（2018a）の分析枠組みでは、スポーツ組織が生成する制度によって行為者の社会的性格の多くが決定されるという論理が示されつつも、スポーツ組織が生成する制度外における行為者との関係が示されていなかった。一方で、笠野（2018b）の分析枠組みは、制度外における行為者との関係も包含されており、笠野（2018a）の理論的枠組みを発展させた分析枠組みとして捉えられる[注4)]。追って詳述するが、ブラジルはドイツとは異なり、多くの行為者はスポーツ組織[注5)]が生成した制度外でサッカーをしていることから、本稿では、笠野（2018b）の分析枠組みを用いることとする。

２．本研究の目的

本稿では、この笠野（2018b）の理論的分析枠組みから、ブラジルのサッカーにおけるスポーツ組織と行為者の社会的性格との構造的関係を解釈し、その現状と課題を明らかにすることを目的とする。ブラジルは、言わずと知れたサッカー王国と呼ばれる国であり、ブラジルとサッカーとの関係を多様な側面から研究したリーヴァー（1996）が述べるように、サッカーがブラジル国民としての誇りを育成し、世界のスポーツ共同体の尊敬がブラジルに集まっている。また、日本のＪリーグ発足前後の時期から多くのブラジル人サッカー選手が来日しており、日本サッカー界に大きな影響を及ぼしていると考えられるが、未だ日本はブラジルほどにサッカー大国になっていない。そのようなブラジルを事例として取り上げることは、日本のサッカーの課題を明らかにするためにも大きな意義があると考えられる。したがって、ブラジルのサッカーにおいて、スポーツ組織がどのような制度を創出し、その制度によってどのような行為者の社会的性格が形成されているのか、あるいは社会的性格形成に制度（やスポーツ組織）が及ぼす影響はないのか、その現状と課題を示すことを目的とする。また、その状況とドイツの事例（笠野 ,2018a）を踏まえながら、日本におけるスポーツ組織の課題を若干示すこととする。

Ⅱ　分析の方法

本研究は、ブラジルのサッカーにおける「スポーツ組織と行為者の社会的性格との構造的関係を、ある仮説に基づいて検証する実証研究ではなく、それらの関係を、前述した分析枠組みに基づいて現象から解釈し、仮説を生成するものである」（笠野 ,2018a, p.22）。したがって、本研究においてもドイツの事例（笠野 ,2018a）と同様に、ブラジルのサッカーにおける行為者に対するインタビュー内容から、特にブラジルのサッカーにおける制度的構造との関係に焦点をあてた彼らのライフヒストリーを呈示すると同時に、彼らの社会的性格を解釈していく。そして、その制度的構造を生成する主体としてブラジル・ミナスジェライス州サッカー連盟（Federação Mineira de Futebol：以下「FMF」と略す）を位置づけ、それらの構造的関係を明らかにする。

まず、ブラジルサッカーにおける制度的環境[注6)]を、FMF 及び「プロ選手への保証協会」（Associações de Garantia ao Atleta Profissional：以下「AGAP」と略す）[注7)]に対するインタビュー、ブラジル調査における研究協力者（以下「伯協力者」と略す）[注8)]からの情報等を基に概説する。具体的には、FMF の構造を示す

とともに、FMF がどのようにブラジルにおけるサッカーの状況を捉え（ここでは、AGAP からの情報も参考になるためそれも踏まえる）、それに対してどのような制度的環境を生成しようとしてきたのか、その特徴を明らかにする。次に、ブラジルのサッカーにおける行為者に対するインタビューを基に、特にサッカーとの関係に焦点をあてた彼らのライフヒストリーと社会的性格を解釈しながら示していく。そして、それらを踏まえて、スポーツ組織（FMF）及びそれが生成（しようと）する制度的環境の特徴と行為者の社会的性格との構造的関係を解釈する。最後に、そこで明らかにされた内容と日本の場合とを比較し、特にその差異を中心にしながら、日本サッカー協会の課題を示す。

調査概要は表１のとおりであり、対象者（E―G 氏）[注9)] の選定にあたっては、ドイツの場合（笠野 ,2018a）とは異なり、ブラジルではブラジル全土を網羅する統一的なクラブ制度やリーグ構造が確立されていないと考えられる[注10)] こと、また、近年の急速な経済発展によってサッカーに関係する制度を含めた多くの環境が急激に変化していることから、年齢の条件設定による日本との比較よりも、むしろ年代が異なる様々な行為者のライフヒストリーから、制度的環境と社会的性格との関係を確認することを優先した。ドイツの事例（笠野 ,2018a）と同様に、「ライフヒストリー法は事象の個別性、固有性を重視すると同時に、個別を通して普遍にいたる道を志向」し、「個性記述の蓄積を通して類型構成へいたることができる」（谷 ,2008a, p.iv）ものであることから、個性記述の蓄積となることを志向する。また、「一般に、社会調査の成否のカギを握る」（谷 ,2008b, p.36）調査者と対象者のラポール（信頼関係）については、対象者３人ともに通訳を担った伯協力者の知人であることから、信頼関係が十分に確保できていると考えられる。オーバーラポールには注意し、調査前には研究の趣旨及び調査目的の説明を行った。

Ⅲ　FMF（スポーツ組織）と FMF が生成する制度的環境

図２：ミナスジェライス州の位置

１．FMF の構造とブラジルサッカーの現状

ブラジルでは、ブラジルサッカー連盟（Confederação Brasileira de Futebol：以下「CBF」と略す）がブラジル全土のサッカーの統括組織であるが、CBF が主催するブラジル全国選手権（全国リーグ）が始まったのは 1971 年であり、それ以前から各州のサッカー連盟が主催する州選手権が行われていたため、州選手権の方が古くからおこなわれている伝統ある大会とされている。そして、全国選手権と州選手権はピラミッド構造になっているのではなく（州選手権で優勝したクラブが全国選手権に昇格し、全国選手権で最下位のクラブが州選手権に降格するような制度はなく）、全く別の大会となっている。したがって、ブラジルにおけるプロクラブは、全国選手権と州選手権の両方に参加している場合が多い。伯協力者によれば、CBF は主に全国選手権の主催とブラジル代表チームの強化の役割を担っており、各州サッカー連盟がアマチュアサッカーを含めた州内全域のサッカーを管轄しているという。そこで、本研究では、CBF ではなく、州サッカー連盟の１つであるミナスジェライス州サッカー連盟を対象として調査・分析を行うこととした。ミナスジェライス州（Estado de Minas Gerais）は、26 州あるうちの１つの州（ブラジルは 26 州に加えて１つの連邦直轄区であるブラジリアで構成されている）で、ブラジルの南東部に位置している（図２）。ミナスジェライスを日本語に訳すと「宝石の鉱山」であり、金やダイヤモンドなどの鉱山開発が進んでいる。この州庁所在地であるベロオリゾンテ市は、人口約 250 万人の計

表１：ブラジル調査概要

調査対象者			調査地（都市）	調査日時
FMF　※地域リーグ ジェネラルディレクター			ベロオリゾンテ	2014年7月2日16：30～17：00
AGAP※タレント発掘プロジェクト コーディネーター			ベロオリゾンテ	2014年7月1日10：30～11：30
E氏	男性	56歳	ベロオリゾンテ	2014年7月1日11：30～12：15
F氏	男性	44歳	ベロオリゾンテ	2014年7月2日18：00～18：30
G氏	男性	19歳	ベロオリゾンテ	2014年7月2日18：30～19：00

画都市（近年急激な都市化が進んでいる）で、国内第６位の都市である[注11)]。

FMF によれば、ミナスジェライス州にある 853 市区町村に、230 ほどのアマチュアサッカーリーグがあるという。それらのリーグは、州のリーグ（１－３部のプロリーグ）とピラミッド構造になっているわけではなく、それぞれが独自の大会として完結する（市区町村のリーグで優勝しても自動的に州リーグに昇格できるわけではなく、州リーグに参加するためには、スタジアムの所有や 100,000 レアル（約 450 万円）の費用が条件となる）。市区町村の各リーグには、20―30 チームほどが参加しているため、4,600―6,900 ほどのチームがあることになる。しかし、FMF の管轄外で、スポーツクラブなどが主催する大会なども多くあり、それに参加するチームを含めると、さらに多くのチームが存在している。

AGAP によれば、プロ選手であっても、３部リーグに所属する選手などの給料は安く、サッカーのみで生活することができる選手はほんの一部だという。そして、アマチュアリーグに所属する選手の多くは、仕事をしながら週に１―２回、あるいは、たまに練習をしてリーグの試合に参加している。ただし、練習といってもほとんどはゲーム（試合・紅白戦）であり、練習・トレーニングは、プロになる才能がある者だけが行うものだと考えられている。また、アマチュアリーグに所属せずに、遊びとしてサッカーを行う人びとも多くおり、そのためのグラウンドや施設がブラジルにはどこにでもあるという。しかし、近年のブラジルの経済発展により、特に都市部ではサッカーをして遊ぶことのできる場所が少なくなってしまい、そのことにより、遊びではなく、クラブやサッカースクールに子どもたちを通わせて、サッカーを子どもに習わせる親が増えている。AGAP の調査対象者は、このことが理由で現在のブラジルサッカーが以前のように「天才（的な選手）」を生まなくなったのだという。彼は、良いサッカー選手は生まれつきの才能がなくてはならず、それは学んで（教えられて）得られるものではないと考えている。実際、クラブ育ちの選手がブラジルを代表するような選手になった例はほとんどなく、現在のブラジルサッカーを牽引している選手の多くは、郊外出身で、遊びの中でサッカーをしてきた選手なのだという。したがって、ブラジルの国土が広く、郊外には遊びとしてサッカーを行う環境が今のところまだ数多く残っていることが、ブラジルサッカーの高い競技レベルを維持することができている要因になっているのだという。

２．FMF が生成しようとする制度的環境の特徴

上述したブラジルサッカーの状況において、FMF は、プロかアマチュアかを問わず各地域のあらゆるレベルのサッカー環境の管理が目的であるという。FMF への登録料は、1 選手 10 レアル（約 450 円）で、多くの場合、選手の所属クラブが負担している。ただし、この登録料は形式的なものであって、選手登録料を FMF の主な収入源にしようとは考えていない。したがって、FMF 以外の組織が主催するリーグなども多く存在するが、そこでサッカーをしている人びとを FMF に登録させて収入を増やす考えはないという。FMF の主な収入源はプロ・リーグの収益の一部とスポンサー料であり、そこで得た利益をアマチュアサッカーに還元していくことが FMF の大きな役割になっている。このことから、FMF に登録を希望するクラブは、クラブ運営やリーグ運営等の補助金を期待しており、補助金なしでも特に問題なく運営ができるクラブやリーグは FMF に登録していない（FMF も登録させようとは考えていない）。また、FMF に登録することで、リーグの審判が FMF から派遣されるなどのメリットもある。FMF はクラブや選手が FMF に登録するか否かは自由だが、貧しいクラブ等には支援が必要であると考え、彼らに援助することが FMF の大きな役割の１つであるという。伯協力者によれば、CBF や FMF はブラジル代表を強くすることやブラジルサッカーの競技レベルを高めることがその役割であって、本来であれば、アマチュアサッカーは管理する必要がなく、自由にしておけば良いという。しかし、ブラジルにおける貧富の差が大きいことから、FMF のように、支援が必要なクラブ等には登録をさせて援助をしていくという役割も必要なのだという。さらに、FMF は、治安の面でも、すなわち、子どもたちがストリートチルドレンになる危険から守るという意味でも、アマチュアサッカーを支援していく必要があるという。AGAP は、そのような考えの下、貧しい子どもたちがサッカーをする環境をつくっている。そこでは、才能のある子どもを発掘するという目的もあるが、彼らをしっかりと学校に通わせるなど、恵まれていない子どもたちに対する社会貢献の意味合いが強い。

以上から、FMF が生成しようとしてきた制度的環境として、次の特徴が示される。それは、組織の目標は、あくまでもブラジルサッカーの競技レベルを向上させることであるが、ブラジルにおける貧富の差が大きいことから、貧しい地域のリーグやクラブ等に対しては、彼らがサッカーを楽しめるような支援をするこ

とも FMF の大きな役割であると考えている。すなわち、ブラジルサッカーの競技レベルを向上させる環境づくりと、サッカーを楽しむことができない貧しい人びとへの支援（貧しい人びともサッカーができるような環境づくり）が FMF の役割であると捉えられている。したがって、サッカーができる環境がないほど恵まれていない状況ではなく、かつ、競技レベルの向上を第一の目的としない、いわゆる遊びとしてサッカーを楽しむ人びとは、FMF とは関係なく自由にサッカーをすれば良く、彼らを視野に入れた（彼らを意識した）制度的環境を FMF は生成してきてはいないといえよう。

Ⅳ　ブラジルのサッカーにおける行為者のライフヒストリー及び社会的性格

１．Ｅ氏のライフヒストリー及び社会的性格

（１）Ｅ氏のライフヒストリー

ボールを蹴り始めたのは５―６歳の頃で、中流階級の家庭（Ｅ氏の父親は空軍に勤めていて子どもが８人いた）の子どもは誰でもやるように、遊びのサッカーをしていた。ブラジルでは８年生（14―15 歳）まで学校は午前の部か午後の部のいずれかしかないため、それ以外の時間に友達とサッカーをしていた。当時は家の近くにサッカースクールはほとんどなかったが、友達がクルゼイロ（ブラジル全国１部リーグ及びミナスジェライス州１部リーグ所属クラブ）のキッズチームのゴールキーパーで、12―13 歳のときに、Ｅ氏にクラブに入るテストを受けるように勧めてくれた。そのテストに合格してから、初めて練習としてサッカーをした。しかし、14 歳で 148cm の身長しかないような小柄な身体だったため、最初の２年間は大会に出場できず、水曜と金曜の練習で身体づくりばかりしていた。そして、15 歳の頃、ある人がサンタテレーザという地域で新しいクラブをつくり、クルゼイロや他の強豪クラブの選手で大会に出場できずに不満を持っていた選手をスカウトしており、Ｅ氏もスカウトされた。そこではほとんど毎日練習をして、大会にも出場して 15 日ごとに給料も支払われていた。給料をもらうようになり、仕事として練習をすることが増えていったが、友達と近くのグラウンド（現在とは異なり、当時は遊ぶ場所がたくさんあったという）で楽しむことも忘れなかった。そして、17 歳でプロに誘われ、父親にも背中を押されてプロ選手となった。そこでの走り込みや筋力トレーニングは苦痛だったが、仕事（＝プロ）なのでやらなければならなかった。17 歳から 19 歳までは学業と両立し、19 歳で高校を卒業した後も、プロ選手として 27 歳まで続けた。その間は、プロではあったが、州の下部リーグ[注12)] のクラブを転々としており、また、プロとしての給料も３―４か月遅れて支払われるのが当たり前だったこともあり、サッカーのみで生計をたてることはできなかった。そして、27 歳のときに、ブラジル連邦貯蓄銀行への採用試験に合格したため、プロ選手を辞めることにした。その後は、週末に田舎のアマチュアの試合に出場したり、現在でも職場（40 歳で法学部を卒業して AGAP の弁護士となった）のアマチュアチームの試合に出場したりしてサッカーをしている。

（２）Ｅ氏の社会的性格

Ｅ氏は５―６歳頃からサッカーを始めているものの、練習をしたのは 12―13 歳頃からであり、プロになるための選手、あるいは、プロ選手は辛くて苦しい練習をすることが必要だと考えている。特に、15 歳の頃から少しではあるが給料をもらうようになり、練習をしなければならないという意識が強くなった。ただし、友達とサッカーを楽しむことも忘れず、練習の中でもボールを使ったゲーム（試合）は楽しかった。27 歳まで一生懸命練習をしてきたので、プロサッカー選手を辞めて、銀行で（サッカーとは異なり、机の前で事務）仕事をするということにストレスやフラストレーションが溜まった。しかし、プロ選手を辞めた後のサッカーに関しては、勝たなくてはならないというプレッシャーが少なくなったことで、むしろ以前よりも楽しいと感じている。また、27 歳でプロ選手を辞めたときは、もっと有名な競技レベルの高いクラブ、あるいは、海外でプレーすることも目指していたので、とてもショックだったが、「あなたがそこにいるのはそこにいるべきだから。下手だから、上手だからとかではない」というように、努力が足りなかったということではない。したがって、サッカーという仕事から事務仕事に変わり、その仕事に慣れるのは大変だったという意味でフラストレーションが溜まった時期はあったが、サッカーに関しては、今でも楽しくボールを蹴ることができている。周囲には自分よりもサッカーが下手な選手は多くいたが、サッカーが上手くても下手でも、みんなサッカーが好きだった。

２．Ｆ氏のライフヒストリー及び社会的性格

（１）Ｆ氏のライフヒストリー

Ｆ氏は、５歳からボール遊びを始めて、８歳で会員制クラブのフットサルチームに入った。そのクラブに

は、習い事のように誰でも入ることのできるスクールと本格的なチームがあり、Ｆ氏は本格的なチームでフットサルをしていた。12歳になるまでは週に１―２回の練習だったが、12歳からは平日毎日19時30分から21時までコーチの指導の下、基礎練習、フィジカルトレーニング、戦術等の練習をしていた。そして、17歳までフットサルを続け、18歳でサッカーに転向した。17歳までは毎日フットサルの練習をして地域の大会や州の大会などに出場していたが、学校や週末のグラウンドで遊びのサッカーもたくさんしていた。フットサルチームに入っていたものの、ずっとプロサッカー選手を目指していた。サッカーチームに入らなかったのは、そのような機会（環境）がなかったからだが、17歳のときにアトレチコ（ブラジル全国１部リーグ及びミナスジェライス州１部リーグ所属クラブ）のサッカーチームの練習に参加した。しかし、アトレチコに入ることはできず、18歳でクルゼイロにも挑戦した。結局クルゼイロでもプロ選手になることはできなかったが、20歳まではクルゼイロで練習に参加していた。その後、サンパウロの郊外にある３―４クラブでプロ選手になる挑戦をしたが、いずれも不合格でベロオリゾンテに戻ってきた。そこで、父親からプロ選手になることを諦めるようにいわれ、挑戦を辞めた。ただし、その後も仲間とチームをつくって大会に出場するなど、サッカーはずっと続けている。そして、現在は仕事としてクラブを経営し、そのクラブ内でトレーニングジムの運営とフットサルスクール（教室）を開催し、指導もしている。

（２）Ｆ氏の社会的性格

12歳から17歳までほとんど毎日練習をしていたが、楽しいというより、常に競技レベルを向上させるための要求があり、また、試合に先発メンバーとして出場できるのかどうかなどを考えなくてはならず、苦しかった。しかし、プロ選手になるために「やらなくてはならない」という気持ちがあった。周囲には練習をせずに遊びのサッカーのみをして楽しんでいる友達も多くいたが、彼らは才能がないから練習をしても意味がない。だからといって、彼らを見下しているのではなく、基本的にサッカーは楽しめれば良く、才能のある者だけが練習をして、苦しいことにも耐えなければならない。Ｆ氏が現在指導しているフットサルスクールでも、子どもが楽しんでプレーできるようにしている。しかし、参加している子どもたちの親は、才能の有無にかかわらず子どもをプロにさせたいと思っているため、親からのプレッシャーは大きい。また、13―14歳くらいまでの子どもは、プロになれると全員信じており、プロになるための苦労もわかっていない。ただし、指導者として夢は壊したくないという思いもあり、才能がないとわかっていても、頑張っている子どもにはっきりとそれを伝えることはできない。親は自分の子どもにあまり才能がないとわかっているのに、自分がプロ選手になれなかった夢を子どもに託している（親が子どもを無理にフットサルスクールに通わせている場合もある）ことに問題があると感じている。アトレチコやクルゼイロなどは、子どもに練習をさせてプロ選手にさせようとするクラブだが、ここ（Ｆ氏が指導するフットサルスクール）は、子どもが楽しめれば良い。Ｆ氏の兄はＦ氏と比べてサッカーの才能があまりなかったが、ずっと遊びでサッカーを続けて楽しんでいる。Ｆ氏も結局プロ選手にはなれなかったが、それは多くの要因に影響されていることで、個人の特性だけによるものではない。したがって、下手だからといってサッカーが楽しくなくなるものではない。

３．Ｇ氏のライフヒストリー及び社会的性格

（１）Ｇ氏のライフヒストリー

Ｇ氏はＦ氏のクラブで４歳からボールを蹴り始めた。父親がこのクラブで遊びとしてサッカーをしていたことや家から近かったことがきっかけだった。そこでは、週に３回の練習と週末の練習試合があり、基礎練習などもあったが遊びのようなミニゲームなどが多かった。そして、11歳のときに別のクラブ（フットサルチーム）に入って毎日練習するようになった。さらに、12歳では地域のサッカークラブに入り、14歳まではサッカーとフットサルの両方を行い、毎日練習（フィジカルトレーニングも含む）していた。14歳になるとアメリカ（ミナスジェライス州１部リーグ所属のプロクラブの下部組織）に入り、フットサルは辞めて毎日そこでサッカーの練習をしていた。そして、17歳でアトレチコに引き抜かれ、現在もプロ選手を目指して練習に励んでいる。

（２）Ｇ氏の社会的性格

現在、遊びとしてサッカーを楽しんでいるのではないが、プロ選手を目指して練習することも楽しんでいる。ただ、遊びとは異なり、クラブのコーチからは、技術的なことや戦術的なこと、さらに結果を強く求められ、責任が増したことは確かだと感じている。また、もし自分がプロ選手になれなかった場合、自分の努力が足りなかったとは思わず、穏やかな気持ちでいられると思うという。そして、その後も一生楽しく遊びと

してのサッカーを続けていくことができると考えている。周囲にも、プロ選手を一緒に目指していたものの、途中で断念した友達がいるが、サッカー（遊びとしてのサッカー）を辞めた人はほとんどいない。

V　ブラジルのサッカーにおけるスポーツ組織と行為者の社会的性格との関係

これまでの調査結果をもとに、ドイツの事例（笠野 ,2018a）と同様に、ブラジルのサッカーにおけるスポーツ組織（FMF）及びそれが生成する制度的環境と、行為者の社会的性格との関係を解釈してみる。はじめに述べたように、本稿は、スポーツ組織が生成する制度によって制度内の行為者だけでなく、制度外の行為者の社会的性格形成にも影響を及ぼすという笠野（2018b）の分析枠組みに基づいて、主にインタビューから FMF が生成する制度的環境の特徴と制度内外の行為者の社会的性格を示し、それらの関係を解釈することで、その現状と課題（の仮説）を明らかにするものである。

まず、56 歳の E 氏と 44 歳の F 氏は遊びとしてサッカーを始めているのに対し、19 歳の G 氏は 4 歳でクラブに入ってサッカーをしており、AGAP の調査対象者が述べたように、近年は遊びとしてサッカーができる環境が少なくなっていることがうかがえる。しかし、E 氏･F 氏･G 氏のいずれも（年代は異なっても）、サッカーは基本的には楽しむものであり、一方でプロ選手になるためには苦しい練習や結果（責任）が求められるものであると考えていることは、ドイツの事例（笠野 ,2018a）と同様であるといえよう。ただし、ドイツの場合のように、それらの価値が同列・並列に捉えられているというよりも、図３のように、多くの者にとってサッカーは楽しいものであるが、一部の「才能」のある者にとっては、苦しくもあり、努力して結果を求められるものであると考えられている。ブラジルにおいては、この「才能」という個人ではコントロールできないものが、彼らの性格形成に大きな影響を与えていると考えられる。例えば、AGAP の調査対象者が「良いサッカー選手は生まれつきの才能がなくてはならず、それは学んで（教えられて）得られるものではない」といい、F 氏も「基本的にサッカーは楽しめれば良く、才能のある者だけが練習をして、苦しいことにも耐えなければならない」ということなどから、プロ選手になれるかどうか、競技レベルが向上するかどうかは、才能に因るところが大きいと考えているといえる。したがって、G 氏が「もし自分がプロ選手になれなかった場合、自分の努力が足りなかったとは思わず、穏やかな気持ちでいられると思う」というのも、そのためであると考えられる。

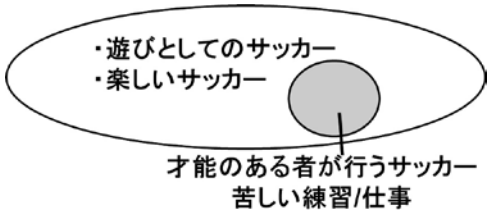

図３：ブラジルにおけるサッカーの捉え方

このようなブラジルのサッカーにおける行為者の社会的性格は、一方では、FMF が生成してきた制度的環境とは直接的には関係がないように思われる。FMF は、州のプロ・リーグを主催してブラジルサッカーの競技レベルを向上させると同時に、サッカーを楽しむことができない貧しい人びとへ支援をするという制度的環境をつくることが役割となっており、それ以外の多くの行為者（ここでは特にサッカーを「する」人びと）に対しては直接的な関係を持たず、プロ選手と貧しい人びと以外の多くの者への影響（社会的性格形成への影響）は大きいとはいえない。しかし、スポーツ組織はそれが生成する制度外の行為者にも影響を及ぼすという本研究の分析枠組みからは、他方で、FMF がプロ選手と貧しい人びとに対してのみ関係性を持つことにより、サッカーはスポーツ組織や制度に制限されることなく、自ら自由に楽しく遊びとして行うものであるという社会的性格を多くの者が形成していく過程に間接的な影響を及ぼしていると捉えることもできる。FMF や AGAP は、プロは競技レベルを向上させること、そして、恵まれていない人びとはサッカーを楽しむことが重要であると考えており、それは E 氏･F 氏･G 氏の考えと同様に、サッカーは基本的には楽しむものであり、一方で才能のある選手は苦しい練習や結果（責任）が求められるものであると考えていることに一致する。すなわち、本研究の分析枠組みからは、FMF が生成する制度外の多くの行為者は、彼らの社会的性格形成において、FMF が生成した制度から間接的な影響を受けていると解釈することができよう。

ここで、今後のブラジルのサッカーにおける行為者の社会的性格について述べておきたい。AGAP が指摘するように、近年は子どもの頃からクラブに通ってサッカーをする者が多く、F 氏が指摘するように、そこでは親の要望もあってサッカーを教えられることが多くなってきているという。すなわち、遊びとしてのサッカーが減少してきており、クラブでの教えられる

サッカーを通じて、「基本的には楽しむもの」というサッカーに対する社会的性格が形成され難くなってしまうことが考えられる。このような環境の変化に対して、FMF がどのような制度的環境を生成し、彼らの社会的性格に影響を及ぼしていくのかが今後問われていくのではないだろうか。

最後に、以上のようなブラジルのサッカーにおける現状と課題（の仮説）から、日本サッカー協会の課題は次のように指摘できる。ブラジルのサッカーにおける多くの行為者の社会的性格は、FMF が生成する制度的環境から直接的には影響を受けていないが、間接的な影響を受けていると考えられた。それは、FMF がプロと貧しい人びとに対してのみ直接的な関係を持つことによって、言い換えれば、多くの行為者に対する制度的環境を積極的に生成しないことで、彼らがサッカーは遊びとして楽しむものであるという社会的性格を形成していると考えることができた。このことのみからすれば、我が国においても日本サッカー協会が特に多くのことをせずに、愛好者と呼ばれる人びとに対する制度的環境を積極的に生成しない方が、サッカーそのものを楽しむ社会的性格が形成されるものと考えられる。しかし、この状況は、ブラジルにおいてはサッカーが既に多くの人びとによって行われ、サッカーをするグラウンドや施設などが豊富にあるという条件（サッカーが広く普及されているという条件）が可能にしているものである。一方で、日本においてはブラジルほどにサッカーを愛好する者が多くはなく、サッカーの場（特に遊びとしてサッカーをする場）が十分でないことから、日本サッカー協会が愛好者と呼ばれる人びとの制度的環境を積極的に生成しない方がサッカーそのものを楽しむ社会的性格が形成されるようになるということにはならないだろう。また、スポーツ組織の役割の一つは、「愛好者を組織化し、社会的なスポーツパワーに変換する」（佐伯 ,2004）ことであるという考え方からすれば、彼らをいかに組織化していくのかが今後問われることになる。これらのことを踏まえると、日本サッカー協会は、愛好者がサッカーをする環境（特にグラウンドなどの場）を整える程度とし、彼らをゆるやかに組織化することが課題になるのではないだろうか。すなわち、日本サッカー協会としては、むしろ積極的な支援（リーグ戦や大会を設定したり指導者を派遣して練習をさせたりすること）よりも、サッカーをするグラウンドや施設のみを整え、愛好者に自由に利用させる（サッカーをさせる）ということが求められるのではないだろうか。「ゆるやかな組織化」というのは、そのグラウンドや施設を利用するにあたってのみ日本サッカー協会との関係を持つという程度のことである。2014 年のサッカーワールドカップ・ブラジル大会後に、J リーグの村井満チェアマンが日本サッカーの課題として指摘した「指導者のいない遊びの空間をどうプログラムとして組み込んでいけるか」（朝日新聞 ,2014）という問題は、まさにこのようなゆるやかな組織化の問題として捉えられよう。

また、ドイツの事例（笠野 ,2018a）も踏まえると、ドイツの場合では、ドイツサッカー連盟（DFB）が積極的に会員としての愛好者に対して制度的環境を生成しようとしている（笠野 ,2018a）が、ブラジルの事例から示唆されるのは、愛好者に対しては、サッカーをする環境（特に場）のみを整える程度でも、彼らの社会的性格をプレイ志向にしていく（あるいはプレイ志向のままにする）ことが可能だということである。ただし、日本においてはブラジルほどにサッカーを愛好する者が多くはないというところにまた別の課題があるといえよう。なお、先に述べたように、近年はブラジルでも都市化が進み、サッカーをする場所が減ってきており、子どもの頃から遊びではなくクラブで教えられるものとしてサッカーをする者が増加している。このことは、サッカーをする場（特に遊びとしてサッカーをする場）が少ないという意味で現在の日本の状況に近づいており、彼らがサッカーをする（楽しむ）には、ブラジルにおいても彼らに対する制度的環境を生成していく（整えていく）ことが求められる状況になりつつあるということとして捉えられる。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP25750284 の助成を受けたものである。

注記

注１）本稿でも「高度化」を、笠野（2018a）と同様、競技力向上だけでなく、これまで日本人のスポーツ観の特徴とされていた「身体よりも根性･闘志に代表される“精神主義”や、スポーツに熱中するあまり、遊びを忘れた極度の“勝敗主義”」（山口 ,1988,p.58）、また、それらに関連付けられる、努力、鍛練、修養、真剣、真面目、一所懸命、向上、練習、速い、高い、強い、といった意味を含み、勝利至上主義にもつながる概念として捉える。

注２）「社会的性格」についても笠野（2018a）と同様に、個人の性格構造が集まってある社会集団に共通なものとしてみられる段階に至ったものとして捉える。

注３）笠野（2018a）の研究では、ドイツサッカー連盟が、同

連盟は会員のための組織であること、すなわち、会員それぞれ（高度化志向の会員であれプレイ志向の会員であれ）のニーズに応えることの重要性を認識しているため、同連盟が形成する制度的環境の（クラブの）中で育成された行為者は、高度化志向とプレイ志向のサッカーには優劣関係があるわけではなく、どちらにも価値があるもの（同列・並列するもの）として捉えることができていると解釈されている。一方、日本では会員のための組織であるという認識が乏しく、そのことが日本サッカー協会の課題として示唆された。

注４）笠野（2018b）は、図１の枠組みをさらに発展させて、スポーツ組織の主体性と行為者の主体性という２つの主体性を含めた「主体的なスポーツ組織論の理論構成」を提示しているが、本稿では行為者の主体性は一旦考察の対象外として分析をすすめることとする。

注５）笠野（2018a）は、スポーツ組織を、「各スポーツ競技を統括する権限と義務をもつ各スポーツ競技の国内統括団体であるスポーツ競技団体」と定義しているが、ブラジルでは、後述するように、州の統括団体が歴史的にスポーツに関する大きな権限と義務をもっているため、本稿では、「国に限らず州レベルを含めた各スポーツ競技を統括する権限と義務をもつ各スポーツ競技の統括団体であるスポーツ競技団体」と定義する。

注６）笠野（2012）が示した「制度的構造」の構成要素は、①スポーツ・イデオロギー、②スポーツ・ルール、③スポーツ・シンボル、④スポーツ行動様式、⑤スポーツ文物、⑥スポーツ組織の６要素であるが、本稿ではドイツの場合（笠野 ,2018a）と同様、研究方法等の問題から、制度的構造の構成要素それぞれを詳細に示すことが困難であるため、制度的構造の全体像を「制度的環境」として、その特徴を示すことにとどめる。

注７）AGAP は、元プロサッカー選手のみが働いており、プロ選手のセカンドキャリアを保証することが目的となっている。したがって、プロ選手時代に多く稼いだ選手は働いていない。そして、元プロ選手を様々なところに指導者として派遣することなどを通して、元プロ選手の支援をしている。調査対象者は、AGAP とベロオリゾンテ市で行っている「BH Descobrindo Talento」（ベロオリゾンテタレント発掘）というプロジェクトのコーディネーターをしている。このプロジェクトは、基本的には 12―18 歳の恵まれていない子どもたちを対象に、元プロ選手の指導者がサッカーの練習をさせて、才能のある子どもがいればプロクラブに紹介するというもので、参加者の条件は学校に通うこととしている。基本的には、社会貢献のためのプロジェクトであり、現在、およそ 1,500 人の子どもたちと 30 人ほどの元プロ選手の指導者が参加している。

注８）伯協力者は、21 歳でブラジルから日本にサッカー留学という形で来日し、その後Ｊリーグの前身である日本リーグで活躍（リーグ優勝・天皇杯優勝等）した。引退後はフットサル日本代表監督や全国各地でサッカー教室を行い、40 年以上日本に在住している。現在も、サッカー教室の講師や試合の解説者などを通して、日本におけるサッカーの普及に尽力している。調査時にはこの伯協力者にコーディネート及び通訳を依頼し、適宜ブラジルサッカーの情報の提供も受けた。

注９）ドイツの事例（笠野 ,2018a）における対象者が A―D 氏とされていたため、それらの対象者と混同されないようにＥ―G 氏とした。

注 10）追って説明するが、伯協力者によれば、ブラジルサッカー連盟は、主にプロの全国リーグ及び代表チームの管轄をしており、各州のサッカー連盟との関係は希薄であるという。実際に、プロクラブは、ブラジルサッカー連盟が管轄する全国リーグと州のサッカー連盟が管轄する州リーグの両方に所属していることが多く、その意味でも、ドイツのようなアマチュアまでをも統括するような統一的なクラブ制度やリーグ構造が形成されていないと考えられる。

注 11）IBGE（instituto brasileiro de geografia e estatistica：ブラジルの地理統計研究所）によると、2014 年のベロオリゾンテ市の人口は 2,491,109 人で、サンパウロ、リオデジャネイロ、サルヴァドール、ブラジリア、フォルタレーザに次ぐ第６位となっている（IBGE，online）。

注 12）ミナスジェライス州では１―３部がプロ・リーグで、ここでの「下部」とは２部や３部のことと思われる。

文献

朝日新聞（2014）W 杯を視察したＪリーグ・村井チェアマン．7 月 5 日朝刊 13 版 -19 面.

IBGE（online）OS MUNICÍPIOS MAIS POPULOSOS. http://www.ibge.gov.br/home/presidencia/noticias/pdf/analise_estimativas_2014.pdf,（参照日 2016 年２月１日）.

笠野英弘（2012）スポーツ実施者からみた新たなスポーツ組織論とその分析視座．体育学研究 ,57（１）：83-101.

笠野英弘（2018a）ドイツのサッカーを事例としたスポーツ組織と行為者の社会的性格との構造的関係．山梨学院大学スポーツ科学研究 , １：19-32.

笠野英弘（2018b）主体的なスポーツ組織論の理論構成とその意義―行為者の主体性との関連から―．スポーツ社会学研究 ,26（１）：43-58.

黒須充（1988）クラブスポーツと学校運動部の可能性―選手づくりの長所と短所―．三好喬ほか編，スポーツ集団と選手づくりの社会学．道和書院，pp.67-84.

黒須充・梅野孝・山田幸雄（1987）民間テニスクラブにおけるジュニア育成に関する研究―クラブ育ちと運動部育ちの社会化過程の比較を中心に―．日本体育学会大会号 ,38A：126.

松尾哲矢（2015）アスリートを育てる＜場＞の社会学．青弓社.

リーヴァー：亀山佳明・西山けい子訳（1996）サッカー狂の社会学．世界思想社.

佐伯年詩雄（2004）現代企業スポーツ論～ヨーロッパ企業のスポーツ支援調査に基づく経営戦略資源としての活用～．不昧堂出版.

谷富夫（2008a）はしがき．谷富夫編，新版ライフヒストリーを学ぶ人のために．世界思想社，pp. ｉ - vi.

谷富夫（2008b）ライフヒストリーで社会を読み解く．谷富夫編，新版ライフヒストリーを学ぶ人のために．世界思想社，pp.1-38.

山口泰雄（1988）日本人のスポーツ観．森川貞夫・佐伯聰夫編，スポーツ社会学講義．大修館書店，pp.56-67.